

先史時代における『日本海文化』成立にかかわる石器石材環境の基礎的研究

中村 由克

1. はじめに

日本海沿岸を中心とした文化圏が誕生したのは旧石器時代である。後期旧石器時代の最も寒冷気候だった約2万年前ごろ以降、日本列島各地に地域性が芽生え、北陸地方を中心とした日本海沿岸地域に独自の石器文化が発達したことが知られている。福井県から長野・新潟県にひろがる「瀬戸内系石器群」、長野・新潟県から山形県にひろがる「杉久保系石器群」、石川県から青森県にひろがる「東山系石器群」などがその代表例である。

これらの石器文化（石器群）は、それぞれ石器の形態・製作技法が違っただけでなく、特定の石材を主要な材料として選択していることが特徴である。したがって、石器の石材に着目して、その種類の鑑定、原産地の特定をおこなうことによって、当時の人類の移動経路が解明でき、また、地域文化成立の要因解明に向けた基礎資料が得られることが期待される。

そこで、本研究では日本海沿岸地域にみられた初期の「日本海文化」とも考えられる石器文化を対象として、それらの石器石材の原産地推定と移動の実態を解明することを目的とする。

2. 従来の研究

富山県内の遺跡でよく使用される石器石材は、立野ヶ原系石器群が碧玉（鉄石英）・玉髓（メノウ）、瀬戸内系石器群が安山岩・下呂石、石刃系石器群（東山系・茂呂系など）が頁岩または濃飛流紋岩、そして尖頭器石器群が黒曜石・安山岩などとされてきた（麻柄 1987, 2006 など）。これらの内、碧玉と玉髓は南砺市周辺に原産地が知られていたほかは、富山県内で石材原産地の存在は明確には知られていなかった。20 年度の研究では、富山県内に無斑晶質安山岩の石材産地が広く分布することを明らかにし、また、「濃飛流紋岩」とされていた石材は、珪質頁岩と凝灰岩などの堆積岩である可能性を指摘した。

21 年度の研究では、富山市野沢遺跡などの「濃飛流紋岩」石器を鑑定調査し、石材中に微化石が発見されたことなどから、主要なものはすべて北陸から東北の日本海側地域に原産地がある珪質頁岩であると判明した。さらに、富山県の旧石器時代の石斧は、蛇紋岩でなく透閃石岩である可能性を指摘した。

3. 研究方法

野外調査では、地質文献をもとに地質分布の予測を立てた上で、石器石材となりうる原岩の分布、採集可能地の検討をするための地質調査を河川流域や海岸に沿って実施した。各地点の石材サンプルを採集して、石材データベースを作成した。

室内研究では、石器の石材鑑定を実施し、石材サンプルとの比較をおこなった。石器石材の観察記載は、非破壊の方法により、金属顕微鏡（実体として使用）観察、比重測定、磁性調査、帯磁率測定などをおこなった。

4. 旧石器時代の石斧の石材

1) 22 年度の研究では、旧石器～縄文時代を代表する石器であった石斧の石材を中心に、原産地の調査と主要な遺跡の石器石材の鑑定を実施した。旧石器時代の局部磨製石斧などの石斧は、約 3.8～2.9 万年前（AT 火山灰の降灰以前）の後期旧石器時代の初期にだけみられた。また、縄文時代の定角式磨製石斧は、富山、新潟県境部の「蛇紋岩」を使って大量に生産され、主に縄文時代前期（約 6.5 千年前）以降、関東・中部圏まで流通したことが定説になっている。

旧石器時代の石斧は、全国で約 800 点とされ貴重な存在であるが、富山県では 1970 年代から直坂遺跡（富山市）など各地で出土して注目される地域であった。これまでに富山 10 遺跡 14 点、新潟 1 遺跡 11 点、長野県 3 遺跡 7 点、長野県信濃町 19 遺跡・地点 219 点、および関東地方 10 遺跡 59 点を調査した（中村、印刷中 1）。

2) 野尻湖遺跡群（信濃町）をはじめ北陸地方の旧石器時代石斧は、「蛇紋岩」とされていたが、昨年の研究で透閃石岩（軟玉の一種）であることが判明した。今年度は、北陸地方における大半の旧石器の石斧を調査し、長野県白馬-八方尾根や新潟県青海川・姫川などの透閃石岩が中

心で、一部に角閃岩 (Iizuka et al 未公表)、蛇紋岩 (全部で4点確認) を含むこと、これ以外には凝灰岩などが補完的に使用されていたことが判明した (中村 2010a~c)。

3) 関東地方の旧石器の「蛇紋岩製」石斧は、多くが関東山地の緑色岩であることが判明した。

5. 縄文時代の磨製石斧の石材

縄文時代の磨製石斧は、富山県宮崎町の境 A 遺跡や新潟県糸魚川市の長者ヶ原遺跡などの富山-糸魚川の遺跡で集中的に生産されていたことが知られているので、境 A 遺跡 (富山県埋蔵文化財センター) の石斧を中心に調査した。出土数が膨大にあるので、全資料を概観したのち、比重測定等が可能であった磨製石斧未製品 73 点の詳細な分析をおこない、重要文化財指定の磨製石斧完成品 131 点の石材と比較して研究した。その結果、石斧の未製品と完成品の大型品には 26~29%蛇紋岩が含まれ、透閃石岩約 60%であった。一方、石斧完形品の中小型品では、蛇紋岩が 3.8%で、透閃石岩 87.3 という組成であった。大型品には蛇紋岩を約 1/4 含むが、中小型品には軟玉に代表される透閃石岩がほとんどを占める実態が明らかになった (中村、印刷中 2)。

境 A 遺跡をはじめ富山県は日本全国の磨製石斧の中心生産地の 1 つであるが、そこでの使用石材の実態が判明したことにより、各地の消費地での石斧研究に大きな指針を与えるものとなった。

6. 珪質頁岩の原産地と移動

日本海沿岸域に広く分布する珪質頁岩については、野尻湖遺跡群のものを基準として、富山、新潟地域との比較研究をした。その結果、富山~野尻湖遺跡群の一般的な珪質頁岩 (火山灰を少し含み、光沢があまりない) は、十日町市中里などの中越地域の石材が多いと推定される。一方、良質の珪質頁岩 (玉髓質で、樹脂光沢をもつ) は北越地域かそれ以北のもが多いと推定された。新潟県新発田市原産の玉髓質の珪質頁岩が、野尻湖遺跡群まで運ばれていることが判明した。

7. 日本海沿岸域を特徴とする石器石材

珪質頁岩は、日本海沿岸域にそって南北に移動しているが、一般的な想定「良質の山形原産のものが広域にひろまる」のではなく、旧石器時代には 100~200km ぐらいの範囲を移動しているというオーダーである。立美遺跡 (南砺市) の黒曜石は、青森県産とされており約 540km の移動が想定されるなど、広域の分布であるが、珪質頁岩や透閃石岩 (蛇紋岩類) は、旧石器時代には 100~200km の中規模の範囲が想定される。縄文時代には、透閃石岩も 200km 以上の広域の範囲に拡大し、日本海沿岸域に磨製石斧の原産地遺跡が成立する。

3 年間の研究で、日本海沿岸域を特徴とする石器石材には珪質頁岩と透閃石岩 (蛇紋岩類) があり、珪質頁岩は富山地域が東北から北陸、山陰にかけての流通の中間に位置し、それらが繋がるものであることを見通せた。透閃石岩については、北陸原産の石材で、旧石器時代には日本海域の地域石材であったものが、縄文時代には全国的に流通する中核的な役割をはたした。

日本海沿岸域の旧石器~縄文時代は、無斑晶質安山岩、碧玉 (鉄石英)・玉髓、凝灰岩などの在地石材や、信州系黒曜石、下呂石などの中部圏の石材を含みながら、この地域を中心にひろく全国に広がる珪質頁岩や透閃石岩 (蛇紋岩類) を使用した石器文化の中心地として、重要な役割を果たしたことが明らかになった。

文献

- 中村由克 (2009) 「日本海沿岸、富山地域における石器石材環境の研究 1」日本第四紀学会講演要旨集、39、140-141。
 中村由克 (2010a) 「野尻湖遺跡群における石斧石材の再検討-「蛇紋岩」とされた石材の正体を探る-」日本考古学協会第 76 回総会研究発表要旨、126-127。
 中村由克 (2010b) 「旧石器時代における石斧の石材選択」日本第四紀学会研究委員会シンポジウム『日本列島における酸素同位体ステージ 3 の古環境と現代人的行動の起源』16-19。
 中村由克 (2010c) 「旧石器時代における石斧の石材原産地・採集地の推定」信州黒曜石フォーラム 2010 発表要旨集、16-17。
 中村由克 (2011) 「旧石器時代北陸の石材環境」考古学ジャーナル、610 号、7-10。

中村由克（印刷中 1）「旧石器時代の石斧の石材鑑定」野尻湖ナウマンゾウ博物館研究報告, 19 号.
 中村由克（印刷中 2）「石斧石材としての「蛇紋岩類」-「蛇紋岩」は石斧にはあまり使われなかった-」日本考古学協会第 77 回総会研究発表要旨.
 麻柄一志（1987）「石器文化と石材選択」同志社大学「考古学と地域文化」3、11-22.
 麻柄一志（2006）「日本海沿岸地域における旧石器時代の研究」雄山閣.



図 1 旧石器時代の石斧（左より）1：蛇紋岩・白岩藪ノ上遺跡（富山県立山町、富山県埋文センター蔵）、
 2：No21 透閃石岩 A1、3：No22 角閃岩、4：No23 透閃石岩 C 2～4 は日向林 B 遺跡（長野県信濃町、
 長野県立歴史館蔵）（中村 2011 印刷中 2）

表 1 境 A 遺跡出土の磨製石斧の石材構成、右は野尻湖遺跡群
 上段：点数、下段：%

（中村 2011
 印刷中 2）

石材	未製品	完形・大型品	完形・中小型品	石斧
透閃石岩	25	8	47	74
A・D	34.2	15.4	59.5	31.9
透閃石岩	21	22	22	109
B・C	28.8	42.3	27.8	47.0
蛇紋岩	19	15	3	3
	26.0	28.8	3.8	1.3
角閃岩	2	1	2	14
	2.7	1.9	2.5	6.0
その他	6	6	5	32
	8.2	11.5	6.3	13.8
計	73	52	79	232

表 2 透閃石岩—透緑閃石岩質石材の分類

（中村 2011 印刷中 1）

分類	緑・暗灰色系	白色系	特徴		
			透明感あり	結晶 小	磁性 弱
軟玉型	A1	A2	透明感 なし	結晶 小	
単一型	B0	C0		結晶 大	
混合型	B (暗灰色が主)	C (白色系が主)		結晶 小	
細粒型	D1	D2			



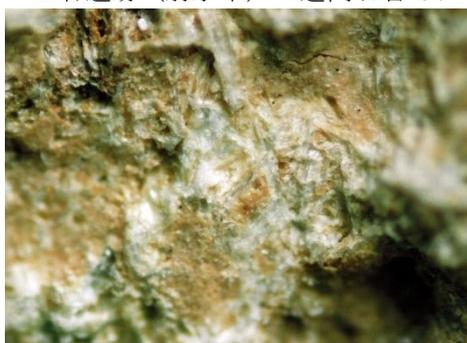
長山遺跡 (富山市) 透閃石岩 C ×50 倍



三谷遺跡 (射水市) 透閃石岩 C0 ×100 倍



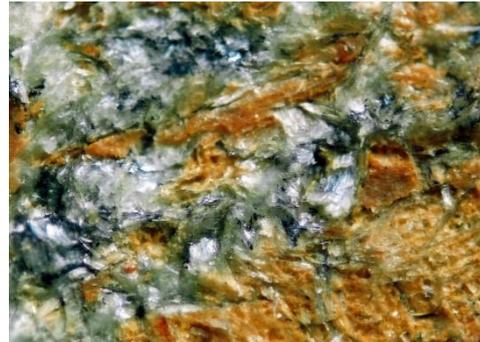
鉄砲谷遺跡 (南砺市) 透閃石岩 C ×100 倍



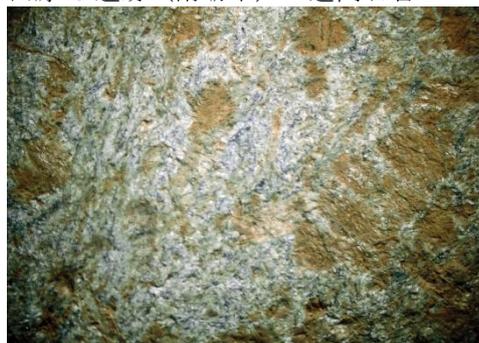
ウラダイラ I 遺跡 (南砺市) 透閃石岩 C0 ×50 倍



西原 C 遺跡 (南砺市) 透閃石岩 B ×40 倍



白岩藪ノ上遺跡 (立山町) 蛇紋岩 ×50 倍



白岩藪ノ上遺跡 (立山町) 蛇紋岩 ×10 倍

図 2 旧石器時代の石斧の顕微鏡写真

(中村 2011 印刷中 1)